

# 巻頭言

## 「知識を入れながら事業活動で知恵を出す」

黒川俊雄

協同総研顧問 /  
慶應大学名誉教授

想えば、太平洋戦争で学徒動員された海軍から敗戦で復員したばかりの私は、目の当たりにした大量失業の中で慶応大学に近い芝浦職安で始まった“職よこせ闘争”の全国的広がり直面し、それによって急遽成立した緊急失業対策法による就労者を中心に結成された全日本自由労働組合の闘いに感動し、その後失業対策事業の打ち切りに直面して闘う全日自労内に事業団運動が全国的に展開されてきたことに、学者だてらにいたく共感した。そしてその事業団運動が労働者協同組合運動に発展し、その中から生まれた協同総研の理事長になり、その労協運動が創り出した高齢協運動の中で、自分の住む神奈川で高齢協の理事長を務めるようになった。そんな戦後の自分史を振り返ってみて、考えさせられることは多々ある。

長い間大学で教鞭をとってきた私は、知識を入れて頭の中だけで考えた事を論文や講義で表現することに夢中だった。ただ読書だけでなく実態調査に基づいて考えていくことが大切だと思ってゼミで学生と共に地域の実態調査をやった。しかし労協運動にかかわり、高齢協運動にとびこんでみて、“仕事よこせ”ならぬ“仕事おこし”で事業活動を進めるために知識を入れながら知恵を出すことの大切さに気づいた。

実際、私は60年近い歳月、軍隊生活で中断されたとはいえ、ひたすら研究調査活動で知識を入れるだけで、事業活動で知恵を出す機会に恵まれなかった。だから貴重な「知識」という宝の“持ち腐れ”をやってしまったように思う。よわい80歳になるとういう私が今更反省しても手遅れだと思ふ。ただ、知識を入れる職業を持つ若い世代に言っておきたいのは、内外の書物や雑誌などを読みあさったり、実態調査から学んだりするだけでなく、何らかの事業活動で知識を入れながら知恵を出す機会を自分でつくるべきだということである。また、すでに「人と地域に役立つ“仕事おこし”」で事業活動に知恵を出す機会に恵まれている若い世代には、知恵を出しながら仕事にかまけて広い視野から新しい知識を入れることを怠らないように、と言いたい。

人はキャッチフレーズで自分の経験から判ったような気になるものである。たとえば、「協同労働」について“出資・経営・労働”が三位一体と言われれば、知識を入れる職業の人は、バイブルで“父なる神・子なるキリスト・聖霊”という三つのものが本来一つのものだという知識から、“出資・経営・労働”が一つになるということ

だと判ったような気になる。自営業などの経験を持つ人は、その体験から“出資・経営・労働”という三つのものが一つになって力を発揮することだということだ判ったような気になる。しかしそれだけでは「協同労働」そのものの意味は判らない。ましてや資本に労働を使われる雇用労働をつづけてきた人には尚更判らない。

いまの日本では、たくさんの人がいっしょに働くには、資本を持つ人(法人も含む)に雇用されることによってあてがわれた仕事に就いて労働することが常識になっている。事実、資本主義の世の中では、雇用されて労働が資本に使われなければ、たくさんの人が一緒に働くことは難しい。そして資本を使いこなす経営という仕事にたずさわる労働は、物づくり労働や人にサービスする労働と対立しがちである。しかもその対立は、事業活動で資本の価値を増やす営利を目的とし、その目的で株式発行や借入金さらには投機によって資本を大きくすればするほど、敵対的になりがちである。だからこそ人は営利を目的とせず、「人と地域に役立つ」ことを目的として、物づくり労働やサービス労働するために自分たちが出資して、労働が資本に使われるのではなく、労働が資本を使いこなす経営という労働を、物づくり労働やサービス労働と一緒に力を合わせてやる「協同労働」を追及することが大切になってくる。しかもこの「協同労働」は、労働の提供者だけでなく、労働を利用する消費者も力を合わせて「人と地域に役立つ」「よい仕事」ができるように「複合協同組合」を創り出していかなければならない。

このような「協同労働」はそう簡単に雇用労働に取って代わるものではない。しかし、「協同労働」が広がっていけば、雇用労働のあり方、さらには事業活動のあり方を変えていくことになるだろう。その土台になるのは、地域で人々がお互いに助け合い、支えあって生活、労働、事業を持続可能にするコミュニティを創り出すことである。そのためには、第121号の「巻頭言」で中田宗一郎氏が提起しているように、「新しい協同組合の新しい共済」であるCC(コミュニティ・ケア)共済を開発し推進することが重要な課題となる。なぜならば、21世紀には、「地域」こそが、ナショナルだけでなく、グローバルを方向づける基盤となるだろうからである。